

テーマ:「豊太郎はエリスを心から愛していたのか」

豊太郎はエリスを心から愛していたのか。私がこの疑問をもった理由は、この作品のラストの部分にある。私はこのラストの部分を読んだ時にある違和感を覚えた。その違和感は、このラストに部分があり淡々と書かれているという点にあった。つまり、エリスが狂ったことに対する豊太郎の感情表現なり、愛情表現がほとんどなされていなかったのである。このことは、豊太郎のエリスへの愛は、心からの純粋な愛ではなかったという証拠にならないだろうか。このことから私は、豊太郎はエリスを心からは愛していなかったと考える。このことを、本文の豊太郎のエリスへの愛の疑わしい表現や、作品全体での豊太郎の性格や感情、行動から検討していきたい。

まず、この作品の中には、豊太郎の心からの純粋な愛ではなかったという考えの根拠となりうる文がいくつかある。そこで、その文を抜き出し、一つ一つ見ていきたいと思う。

- ・『その間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに書を寄せしかばえ忘れざりき』これは、豊太郎はロシアに行っている間、エリスが手紙をよこさなければ、豊太郎はエリスを忘れることができたのとらえろことができる。つまり、豊太郎のエリスへの愛は、少し会わなければエリスの事を忘れてしまうような、弱い愛情だったと考える事ができる。
- ・『捨て難きはエリスが愛』この文からは、豊太郎が捨てられないと思っていたのは、自分のエリスへの愛情ではなく、エリスの自分への愛情であったということが見てとれる。
- ・『もしまことのことなりせばいかにせまし』これは、エリスが妊娠しているかもしれないとなった時の豊太郎の感情である。愛する人との間に子供ができるというのは喜ばしことのはずなのに、豊太郎は、どうしよう、と困惑した。やはり、このことから、豊太郎はエリスのこと心からは愛していなかったのではないかと考えることができる。
- ・『もしこの手しもすがらば、本国をも失ひ名誉を引き返さん道をも断ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起これり。』大臣と一緒に日本へ帰らないかと誘われた豊太郎は、母国も名誉も失い、このまま都会に埋もれるのを恐れたのである。これは、豊太郎が心のどこかでは名誉を求めていたからであろう。そして、エリスを取るか、名誉を取るか迷っていたのである。つまり、豊太郎の心は、エリスに半分、もう半分は名誉によっていたのである。なので、豊太郎のエリスへの思いは、100%ではなかったといえる。迷ったということは豊太郎が純粋な愛をもたなくなった証拠である。

これらのことから、豊太郎はエリスを心からは愛していなかったとすると、ここで疑問なのが、なぜ豊太郎は、エリスを心からは愛していなかったのに、愛しているようなふりをしたのかということである。その理由は豊太郎の性格にある。豊太郎の性格というのは、人との衝突を望まないような性格だった。そのことは、本文で豊太郎自身が述べている。なので、誰とも衝突したくなかった豊太郎は、エリスには愛しているように振るまい、相沢や大臣には言うことをきいていたのである。また、豊太郎は、友に対して否とは言えない弱い心の持ち主であった。友に対してでさえ否と言えなかったのだから、自分を愛してくれているエリスに、日本に帰るなど言えるはずがなかった。つまり、豊太郎のエリスへの思いは、豊太郎の生まれつきの弱い心によるものだったのである。

以上の事から、豊太郎のエリスへの思いは、心からの純粋な愛ではなかったと考えることができる。このように、豊太郎はエリスを心からは愛していなかったと考えれば、今までの疑問、私の感じた違和感を説明することができる。しかし、ここに残る疑問は、免官された豊太郎は、日本に帰るかドイツにとどまるかの選択を迫られた時に、ドイツにとどまることを選んだのはなぜかということである。この時点ではエリスを心から愛していたのだろうか。このことは分からないが、ラストの部分では、心からは愛していなかったことは説明した通り確かである。